



目次	
●巻頭言	1
●全公教茨城大会参加報告	2
●特集	3～4
●郡市教頭会ネットワーク	5
●新入会員の声	6
●随想	7



## 職員の思いに寄り添う

新潟県小中学校教頭会

副会長 坪川 淳助

(新潟市立月潟中学校)

体育祭・運動会の話になると、つい開催時期や内容の削減等の見直しの話題になってしまいます。皆さんはいかがでしょう。

その日は、3日後の体育祭本番に向けて、応援合戦で行うダンスパフォーマンスの練習をしていました。本番目前ですから、リーダーがフォロアーに指示を出して、全体の動きを細かく調整していました。近くにチームの応援担当のA先生が、小さなノートにメモを取りながら練習を見守っていました。メモのことを尋ねると、次のように教えてくれました。「練習後のリーダーの打ち合わせで、生徒に伝えたいことを書いています。だんだん指示の出し方も上手くなって、まとまってきました。ちょっと学級経営に似ていて楽しいです。」と、笑顔を見せてくれました。

体育祭当日、最後の打ち合わせで、職員に一人一言ずつ体育祭を振り返ってもらいました。そのときの、B先生の言葉です。

「練習からみんな全力で、今日の応援合戦も本気でやっていて、生徒はあそこまでやれるんだと思って、すごく感動しました。わたしは、応援練習とかでも遠慮してしまって、あまりかかわることができませんでした。後悔しています。その分来年は、練習から生徒とたくさんかかわろうと思います。」と、目を潤ませていました。B先生の率直な思いを、全職員で聞くことができよかったです。

学校行事は、生徒の資質・能力の向上が目的ですが、同時に私たち職員も成長します。そして、働きがいにつながります。これは、A先生の「楽しい」、B先生の「後悔」「その分来年は」という言葉から明らかです。それにもかかわらず、安易に開催時期の変更や、内容の削減などの見直しの話題を出したと

きに、職員はどのように受け止めるのでしょうか。仮に教育効果が上がるとしても、そこには担当する職員がいて、その職員の働きが今まで削っていなかったかと、配慮不足を反省しました。

さて、文科省で議論されている次期学習指導要領の「論点整理」が公表されました。その中で、今後の検討の基盤となる基本的な考え方として「3つの方向性」が示されています。

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>①「主体的・対話的で深い学び」の実装</li> <li>②多様性の包摂</li> <li>③実現可能性の確保</li> </ul> |
|--|

特に、この③の説明に「…教育課程の実施に伴い教師に過度な負担・負担感が生じないように、持続可能な在り方を追求し、教師と子供の双方に『余白(※教育の質の向上のための時間的余裕)』を創出することで、豊かな学びに繋げる方向を踏まえた検討を行う必要がある」とあり、具体的には、標準授業時数や教科書等の改善の話題が示されています。このことを受けて、学校は新たな見直しを行うことになりそうです。今まであったものを変えなければならない時、なくさなければいけない時に、教頭としてできることは、職員の話を受けとめ、寄り添うことだと思います。そして、見直したことが、職員の働きがいにつながるような工夫を行いたいものです。

次は、音楽発表会です。生徒にとっては、今年の音楽発表会は一生に一度しかありません。それは、職員にとっても同じです。音楽発表会が、職員の働きがいにつながるように、私も楽しく準備したいと思います。

皆さんの学校では、この秋、どんな行事がありますか。

# 全公教茨城大会参加報告



## 第67回全国公立学校教頭会 研究大会茨城大会参加報告

加茂市立加茂中学校

仲村 健一

### 1. 大会参加概要

7月31日、8月1日の2日間、開催された研究大会に参加した。「未来を切り拓く力を育む魅力ある学校づくり」がテーマであった。

### 2. 大会からの学び

#### (1) 学校運営における教頭の役割

校長が示すビジョンや目的を、具体的な実践へと落とし込み、教職員と共に実現する役割がある。さらに教職員の意識と連携を促し、学校全体の方向性を共有する必要性を感じた。

また、「ファシリテーター」として、地域や保護者との関係を築く「窓口」の役割を担う重要な立場にある。

#### (2) 教育環境の整備と人材育成

子どもにとっての最大の教育環境は「教員」である。教職員の資質向上を促し、地域とともにある学校として機能するための環境づくりに注力したい。

アーティストの石井竜也氏の講演では、言葉で教えられない「品性」や「情熱」が、教師の振る舞いとして子どもに伝わることの重要性を感じた。

#### (3) 地域との連携・協働

家庭・地域・学校の連携・協働が必須であり、学校は弱みを地域に見せ、頼ることが大切だという指摘があった。地域や保護者と教職員の気持ちのバランスを調整し、地域の人材や資源を教育課程に活かす役割が、教頭に強く求められていると感じた。

### 3. 今後の実践に向けた所感

本大会で得た学びを今後の学校運営に活かしたい。特に、目標を共有し、研究主任や教務主任を巻き込みながら、具体的な実践に繋がる取組を進める。また、教職員の頑張りを保護者や地域に積極的に発信し、学校全体に活力を生み出すことに努めたい。



## 活力ある学校づくりの 推進に向けて

新潟市立中野小屋中学校

坂井 友紀

7月31日、8月1日に水戸市にて開催された全公教茨城大会では、全国の教頭先生たちと繋がり、さまざまな想いにふれ、学び多い2日間となった。

1日目の石井竜也さんの記念講演では、仲間と協調性を育むために「自由な雰囲気の中で、なんとなくみんなが同じ方向に向かう雰囲気作りが大切」「当たり前のことをありがたいと感じる」という言葉が、地域と共に歩む学校づくりや職員集団づくりなどの場面で共通する考え方として印象に残った。また、午後のシンポジウムでは著名な3名のシンポジストとコーディネーターが人材を育む学校づくりをテーマに語り合った。取組の共通点であった「自分がやりたいことに対して責任をもってやれる環境をつくる」「何を大事にして、どうしたいか組織の中で話し合う(双方向コミュニケーション)」は、管理職として教訓となった。そして、学校運営での人材育成の視点として大切にしていきたいという想いを深めることができた。

2日目は、「教職員の専門性に関する課題」分科会に参加し、研修の工夫や人材育成について深めることができた。午前の協議では、校務分掌におけるメンター制の導入やいろいろな機会での面談等の事例が紹介され、「同僚性・協調性」を職場内で高めるための教頭の働きかけについて意見交換を行った。午後の協議では、指導力のある教員の活用について、町全体の学校の指導力向上に向けて指導教諭を活用する事例が紹介された。新潟市にはマイスター制度があり、自校のみならず、他校の教員研修や指導に活用できるので、活用について管理職として工夫して取り組んでいきたい。

誰もがやりがいをもてる学校づくりのために、どのような仕組みや働きかけで人材を育成するか、全国で多くの教頭がさまざまな実践を積み重ねていることが実感でき、奮起のエネルギーとすることができた。いただいた機会を今後に生かし、管理職として力を尽くしていきたい。

特集

## 我が校の特色的な教育活動紹介

地域の未来の担い手を  
育成する

三条市立第二中学校

桐生 聡

当校は「互いに敬愛しあい たくましく 実践する生徒」の教育目標のもと、「未来を自ら創り出す、一歩ずつ、共に歩む ～自律 創造 協働～」をスローガンに日々教育活動に取り組んでいます。

特にキャリア教育とアントレプレナーシップ教育に注力しており、全ての教育活動においてキャリア教育の視点で目指す資質・能力を捉え教育課程を編成しています。ここ2年は、県アントレプレナーシップ教育実践推進校としてそれまでの活動を進化させ、地域社会との連携を深めながらふるさと三条の未来を担う人材の育成に取り組んできました。

当校のキャリア教育は、生徒自らが将来に対して主体的に考え、行動する力を育成することを目的としています。特に総合的な学習の時間では、地域の企業との連携を強化し、実社会に密着した学びを行っています。主に企業訪問や様々な体験活動を通じて、基礎的汎用的能力と起業家精神を育てています。

活動の具体例として、現3年生は、2年間の三条市と学校での学びを経て、修学旅行で旅行先の大阪で商人体験を行いました。生徒たちは、三条の企業と連携し、ふるさと三条をPRできる地域商品は何かを考え、商業の中心地である大阪のいくつかの商店街において販売体験活動を行いました。

グループごとに地域商品の良さを宣伝するチラシや幟を持参し、商店街の人たちと対話しながら販売していききました。中にはすぐにすべての地域商品を完売したグループもあれば、なかなか売れずに悩んだ班もありました。生徒たちは商業活動での創意工夫や挑戦することの重要性を実感し、大きな学びを得ることができました。現3年生の学校評価における「失敗を恐れず挑戦し、課題や新しい物事に取り組めるか」の肯定的評価は2年時64%から78%に向上し、大きな変容が見られました。

今後も、単なる知識の習得にとどまらない、実社会で必要な資質能力を育成する教育活動を推進し、ふるさと三条の未来を担う人材育成を進めます。

田井のいいトコ  
見つけ田井！

見附市立田井小学校

外山 高宏

これは、私が尊敬する大先輩が田井小学校に勤務されたときにくださった葉書にあった言葉です。国史跡「耳取遺跡」を有する学区の歴史は古く、歴史ある地域から常に温かく見守ってもらっている当校は、「いいトコ」満載の学校です。

○ 地域と共にあり田井！

コミュニティセンターと隣接する当校は、「古紙回収」、「冬のイルミネーション」、「運動会の共催」等々、様々な活動をタイアップしています。コミュニティ主催のみつば祭りでは、子どもが植え、収穫したもち米で餅つきを行い、地域の方々や保護者につきたて餅を振舞っています。

○ 「対話」で子どもの学びを深め田井！

大学教授や中越教育事務所指導主事を講師に招き、深い学び実現のための授業デザインや学習環境のあり方について学んでいます。今年度はNITSが提示する「対話の具体的場面を表すピクトグラム」を用い、「対話」について子どもにも意識させ、授業の質的改善に取り組んでいます。

○ 伝統の「みつば太鼓」を守り田井！

学校の伝統「みつば太鼓」に取り組んでいます。子どもたちは、学校行事や見附まつりで力強い演奏を精一杯披露し、それぞれの活動を盛り上げています。保護者・地域の方々も、子どもたちの演奏を毎回楽しみにしてくださっています。

○ 近隣校と連携し、元気いっぱい活動し田井！

見附市指定のオープンスクール「みつば三校」として、近隣2校と連携し、「低学年リモート授業」「中学年フットサル教室」「高学年みつけ子ども大学」「5年生自然教室」「陸上合同練習会」「児童会祭りの交流」などの、様々な活動を通して交流を深めています。

今年度は全校児童41名の小規模校ですが、学校に集う人々が協力し合い、日々生き生きと活動しています。これからも、田井のいいトコ広め田井！

## 特集 我が校の特色的な教育活動紹介



### SSEで育てる 人とつながる力

魚沼市立宇賀地小学校

小宮山 めぐみ

魚沼市では、市の教育課題である学力向上や不登校児童生徒数の減少を目指し、平成26年度より「温かい学級づくり」を推進してきました。一定の成果を収めたことを受け、令和4年度からは「新・温かい学級づくり推進事業」へと発展させています。本事業は、多様性を包含する学級集団の形成を目指し、すべての児童生徒の相互作用が活発に行われる学級づくりを基本としています。

その趣旨を踏まえ、当校では重点目標を「人とかわかり、思いやりの心を育む」とし、全校一斉のソーシャルスキル教育（SSE）を継続的に実施しています。毎月の生活目標をSSEと関連付け、全校児童が同一のターゲットスキルに取り組むことによって、学習したスキルの般化を促す環境をつくることができます。

具体的には、月初めの全校での学びの場で現実的な場面を設定し、教師が「大切なことだ」と考えさせる教示を行います。児童は、好ましくない例を見て、「どう改善したいか」「自分ならどうするか」と考えながら望ましい行動を学んでいきます。その後、各学級でリハーサルを行い、低学年はシナリオをなぞり、中・高学年は自分の言葉に置き換えて表現します。振り返りでは、気付いたことや感じたことをシートに書き、日常生活で活用できる力へと高めていきます。さらに、保護者にも活動の様子を伝え、家庭でも同じ視点で子どもを見守っていただくよう働きかけています。こうした連携により、学校と家庭が一体となって児童の成長を支えています。

こうした実践を積み重ねることで、自分も他者も大切にしながら、思いやりをもって人とつながる力を育んでいます。

今後も、温かく安心できる学級を基盤として、多様な児童が共に学び合い、生き生きと成長する学校づくりに取り組んでいきます。



### 島全体が学びの場

粟島浦村立粟島浦小学校

星 邦 央

粟島浦小中学校は、新潟県の離島、粟島に位置する小中併設校として、島の自然や文化を生かした特色ある教育活動を展開しています。本校の児童生徒は小中合わせてわずか27名ですが、少人数だからこそ一人ひとりにきめ細やかな指導が行き届き、子どもたちが互いに支え合いながら成長できる学びの場となっています。

我が校の特色的な教育活動は、豊かな海と共に生きる島ならではの学習です。代表的なものに「わかめの栽培・収穫体験」があります。子どもたちは地域の方々と協力し、わかめ巻きから収穫、加工、販売までを一貫して体験します。この活動は単なる体験学習にとどまらず、海の恵みや働くことの大切さ、そして地域と共に生きることの意義を深く学ぶ機会となっています。さらに、得られた収益を学校活動に生かすことで、子どもたちは学びと生活が結びついていることを実感しています。

また、クラブ活動の一環として行われている「アジ釣り体験」も、本校ならではの特色です。子どもたちは自ら釣り竿を手にし、魚を釣り上げる喜びを体験します。その後には、釣ったアジを使った調理実習を行い、命をいただくことの大切さを実感します。自分で獲った魚を自分で調理し、仲間とともに味わう経験は、食のありがたさや命の循環を学ぶ大切な機会となっています。他にもタコ獲り体験や栗拾い体験なども行われます。これらの活動を通して、自然と人との関わりや、食に向き合う姿勢が育まれています。

このように、本校の教育は「島全体が学びの場」であることが最大の特色です。子どもたちは学習や生活の中で地域の方々に支えられながら、自ら考え、行動し、表現する力を育てています。少人数ながらも、島の自然や人々の温かさに包まれた教育活動を通して、子どもたちは確かな学びと豊かな人間性を身に付け、粟島で育ち未来へと羽ばたいていきます。

# 郡市教頭会ネットワーク



## 一人ではない安心感 —妙高市教頭会ネットワークの強み—

妙高市教頭会

水野 頌之助

(妙高市立妙高高原中学校)

私は、教頭として妙高市に勤務して2年目を迎えました。この2年間で強く感じていることは、妙高市における教頭会のネットワークの心強さです。妙高市は小学校・中学校・特別支援学校を合わせても11校しかなく、規模としては決して大きくはありません。しかし、その規模こそが強みとなり、教頭同士が顔の見える関係を築いています。日常の中で困ったことや迷ったことがあれば、すぐに電話やメールで相談できる環境が整っており、安心して業務に臨むことができます。

さらに近年は、連絡や情報共有の手段が多様化しています。新潟県の統合型校務支援ソフトにある連絡・共有ボード機能を利用すれば、必要な情報を一斉に届けることができますし、Microsoft Teamsのチャット機能を活用することで、気軽に素早く意見交換をすることが可能になっています。従来の電話や対面でのやり取りに加え、デジタルツールを組み合わせることで、ネットワークの利便性は大きく高まっています。

私自身、教頭になってからさまざまな場面でこのネットワークに助けられてきました。学校運営上の判断に迷ったとき、行事の準備に不安を抱えたときや職員の健康や保護者対応など繊細な課題に直面したとき等、その都度、先輩方からの具体的な助言や励ましをいただきました。単独では解決が難しい事も、経験豊富な教頭会の先生方の意見に触れることで解決の道筋が見えてきます。まさに「一人ではない」という安心感が、日々の支えとなっています。

学校を取り巻く環境は、社会の変化に伴って年々複雑さを増しています。だからこそ、教頭会のネットワークが果たす役割は一層重要になっていると感じます。これからも私は、この信頼できるつながりを大切にしながら、互いに学び合い、支え合い、妙高市の子どもたちの成長につなげていきたいと考えています。



## 結束力のある 教頭会を目指して

燕市西蒲原郡小中学校教頭会

佐藤 亜記

(燕市立小池中学校)

燕市西蒲原郡小中学校教頭会は、小学校15校、中学校6校、中等教育学校1校、特別支援学校1校の計23名の教頭で構成されています。当郡市教頭会の一番の強みは、情報共有の場が確保されていることです。全県の教頭会の中では中規模の組織ではありますが、だからこそ互いに顔を合わせ、困ったことがあればすぐに聞き合える教頭会です。

昨年度より回数は減りましたが、年間6回の定例教頭会では、燕市教育委員会指導主事の皆様より、業務に関する御指導や国や県、そして郡市に関わる教育活動に対しての情報提供など、教頭にとって日々の校務に即した御指導をいただくことができます。

また、燕市教育長ならびに弥彦村教育長からは「教頭会に期待すること」をテーマに御講話いただきました。直接教育長から御指導いただく機会があり、様々なお話を拝聴し、教頭として日々考えることを直接伝えることができます。更に小中学校長会会長から「教育現場における緊急事態発生時に管理職として、どのような対応が求められるか」をテーマに管理職として身に付けるべき資質・能力のノウハウをご教授いただく研修もあり、教頭会員それぞれが、教頭会での学びを通して成長することができます。

その他、教頭会の代表が研究大会で発表するテーマについて、意見やアドバイスを出し合いながら、代表者一人だけでなく、郡市教頭会として発表者を支援する体制もしっかり構築されています。

毎回の定例会では「学校運営上の諸問題についての情報交換の時間」を確保し、その時困っていることや教頭が知っておくと校務に役立つ情報などを提示しながら、和気藹々とした雰囲気の中で会議を進めています。閉会後も学区での情報交換や小学校教頭、中学校教頭それぞれが輪になって話合いが活発に行われます。

定例会の他にも懇親会を開催し、校務を離れ、リラックスした和やかな雰囲気の中で親睦を深めています。顔と顔を合わせた交流が良い流れを作り、教頭会の結束をさらに深めています。

最後に、互いの結束力が深まることで各校の教育活動が活性化され、そして郡市全体の教育活動がますます発展していくことを願っています。燕市西蒲原郡小中学校教頭会が、これからの予測不可能な未来社会を切り拓き、豊かな社会を創り出す担い手として子どもたちを支えられるよう、切磋琢磨しながら共に日々研鑽に励んでいきたいと思っております。



## 「教頭先生」と呼んで もらえる立場に

柏崎市立剣野小学校

栗田 明 典

4月1日から、子どもたちや職員から「教頭先生」と呼ばれるようになった。子どもたちは学校に1人いる教頭先生として接してくれる。「新しい教頭先生が来た。」という感じ。職員にとっては新任の教頭。さしずめ、「この教頭はどんな人？」といった感じか。教頭が学校に1人しかいないため、経験も力量もない私に対しても、職員は丁寧に報告や相談をしてくれる。不明確な回答や満足した解決にならないことばかりだが、それでも変わらず教頭として私を頼ってくれる。4月は自分のことに精一杯で気付かなかったが、半年が経ち、本当に周りの職員から支えられて教頭をやらせてもらっていると気付く。

剣野小学校で新任教頭を務められることを本当に幸せに感じている。教頭としての力量や人間性を高め、今度は子どもたちや職員がそれぞれの幸せを実感できるように、職務に尽力したい。



## 創り出す喜び

長岡市立上組小学校

黒岩 昭 伸

本校は「全校造形タイム」「子ども学芸員」など、造形教育に力を注いでいます。子どもが作品に向かい合う真剣な眼差しや、表現したときの輝く笑顔にふれるたび、教育の原点は、この創り出す喜びにあると改めて実感しています。

新任教頭として、校長先生をどう支え、先生方の力をどう引き出すか、悩む日々です。とりわけ学校の諸課題に対して、適切な解決策を生み出すことの難しさを痛感しています。しかし、この苦労こそが、自らの成長につながり、やがてはよりよい学校を創り出す喜びに変わるものだと信じています。

未熟な私ですが、校長先生をはじめ、同僚の教職員、教頭会の諸先輩方、地域や保護者の皆様からの温かいご支援に、心から感謝しています。この支えを力に、子どもたちと共に学び合い、創り出す喜びを分かち合える教頭でありたいと願っています。



## 「ともに」

阿賀野市立京ヶ瀬中学校

佐久間 朋 子

新たな環境、新たな業務、新たな職員、そして新たな子どもたちとの出会い。“新しい”づくめの年度始めがすでに懐かしく、遠い昔のように感じられる今、「教頭職っておもしろい！」を実感しながらワクワクする日々を過ごしています。

刺激的な毎日に、「頑張れ自分！」と自身を奮い立たせることは多々ありますが、その度に先生方や生徒からの温かい言葉、温かい心遣いに勇気をもらい、心がほっこりさせられます。

教頭職への挑戦を楽しむために、常に子どもたちや先生方、保護者と「ともに」あることを大事にしたいと思っています。嬉しいこと、悩みや心配、そして感動を「ともに」語り合うことは、大きな幸せとなり、やりがいや充実感につながるからです。私自身も生徒や先生方の幸せのために、教頭としての「先見の明」を磨き、精進していきたいと思ひます。



## 佐渡からの新たな一歩

佐渡市立前浜中学校

長 部 博 光

初めての佐渡、初めての単身赴任は大きな不安を抱えての船出でした。しかし、毎日壮大な海に囲まれ、生徒や保護者、地域、そして先生方のおかげで今では佐渡に来てよかったと心から感じています。

私の理想とする教頭像は、「頼りになる」「仕事が早い」「何でも知っている」「いつも笑顔」「話しやすい」存在です。特に有事の際にはリーダーシップを発揮し、校長を支え、職員を守る大黒柱でありたいと思っています。理想にはまだ程遠いですが、学校や地域の歴史や伝統を学び、不易と流行を意識しながら、地域の一員として日々歩んでまいります。

当校は小中連携の極小規模校（小9人、中11人）で、家族のような温かい雰囲気にあふれています。その良さを大切にしながら、未来を担う子どもたちのために、全力で歩みを進めてまいります。

## 随 想



## デジタルとアナログ

小千谷市立東小千谷中学校

南 雲 桂 太

「教頭として、子どもたちが安心して過ごせる学校づくりを、皆さんと一緒に進めていきたいと思っています。日々の教育活動を支える立場として、先生方の声に耳を傾け、困ったときには気軽に相談していただけるような存在でありたいと考えています。笑顔とチームワークを大切にしながら、温かく前向きな職場づくりに努めてまいります。どうぞよろしく願いいたします。」

以上の文章は現在、ちまたで話題のテキスト生成AIが数秒で作成したものです。この文章の自然な書きぶりや、ポイントを外さない内容だけでもAIの発達は凄まじいものであると感じます。

高度情報化社会の中で大きく変化する教育現場で日々子どもたちに向き合う私たち教職員は、何が求められるのかを自問自答しながら、自校の教育活動全体像を把握していかなければなりません。

ICTの活用は学校において教育活動や業務の効率化、簡素化等を進めた一方で人と人とのつながりを希薄化させ、それによって生じる様々な問題を発生させています。こんな時代に生きている子どもたち自身が夢や希望を実現する努力を続けられるよう学校全体で取り組むためには、教頭として何をすべきなのかを考えながら過ごしています。

私なりに考えた答えは「結局は顔を見て、自分の声でコミュニケーションする」です。Web掲示板に連絡を載せて「既読」になれば通じているのでしょうか。「載せたのに読んでない」で摩擦は生まれていないのでしょうか。ICTの活用でアナログの良さにも気付いた今日この頃です。



## 「正解」

新発田市立加治川小学校

高 澤 元

「教頭はどうだ?」「校長先生…教頭の仕事の正解が分かりません。」

新人教頭として奮闘していた4月下旬のある日、前任校の校長先生に掛けていただいたお言葉に、思わず本音で返してしまいました。そのとき校長先生は、こうおっしゃいました。

「正解なんかない。あなたがやりながら正解をつくっていくのだ。」

その言葉に雷に打たれたような衝撃を受けました。というのも、つい数年前の学級担任時代、卒業生に送った自分の言葉と同じだったからです。しかし、自分が迷いの中にいると、かつてのメッセージを見失い、視野が狭くなり、「正解探し」にばかり気を取られていた自分に気付かされた瞬間でもありました。

これからは、先の見通しが不透明で将来の予測が困難なVUCAの時代だと言われています。学校でも数値で測れる学力はもちろん、目に見えない資質・能力（主体性・やりぬく力・創造性・好奇心・自制心・柔軟性・想像力など）の育成の重要性が叫ばれています。自分の人生を自分らしく歩んでいくために、子どもたち一人一人に最適な力を身に付けさせることが、私たち教職員の使命だと思います。

今、教頭としての型にはまった「正解」を探すのではなく、目の前の子どもたちのために、職員のために何ができるかを柔軟な視点から見付けて実行していくことが大切だと考えています。そして、迷った時は、尊敬できる校長先生方、頼りになる教頭会の諸先輩方に御助言をいただきながら自分なりの「正解」をつくっていきたいと思います。